



ロボット
矢野 徹
角川書店 (文庫)
(2/25刊・¥380)

定評ある、矢野徹の少年物である。映画化の予定もあるようだ。ハインラインという登場人物も出てくる。読んでみると、なるほどハインライン的な物語でもある。主人公の、信念を崩さない姿勢などに、やはりジュヴナイルでの評価が高い、ハインラインを連想させる部分がある。ただ、ここに描かれる優しさ(少年が心の弱さを、克服していく様子)は、あくまでも、矢野流の感性だろう。

最新鋭の貨物船が、何者かに爆破され、島にたどり着いた生存者の中で、ただひとり少年が生き残る。だが、その積み荷には、人工知能ロボットがあった。少年はロボットを組み立て、フライデーと名付ける……。

テクニカルチームは新しいが、本書はもともと、過去に書かれた短篇であり、無人島の少年とロボットという設定が、基本にあることには変わりはない。そこに、理想郷だった過去のアメリカが、重ね合わされている。ジュヴナイルの形態はいくつかあるだろうが、主人公の成長と、尊敬すべき大人たちの図式は、いかに陳腐であっても、やはり欠くことができない、必須事項であることがわかる。ロボットとのからみが、短かったのが残念。(俊)